

“トトロ”と“近藤ブタ” 教育部会 福安 和子

私と佐々木松雄さん（多摩全生園入所者）との最初の出会いは、トトロが縁でした。数年前、「全生園に行ってきたよ」と知人が私に見せてくれた写真は、全生園の陶芸の様子のものでした。その中にトトロがいたのです。

子どものころにしか見えない物、子どものころにしか感じられないこと、それは多くの大人が忘れていた大切な物。そんな“忘れ物を届けてくれる”トトロが大好きな私は、「このトトロに会いたい!」と思いました。

’05年8月、鳥取のハンセン病問題とともに歩む会のメンバー数人と長島愛生園を訪れていた私は、そこで偶然トトロに、いや、全生園のトトロの製作者の佐々木松雄さんに初めてお会いすることができました。

佐々木さんは邑久高校新良田教室卒業生で、なんと近藤宏一さん率いる「青い鳥楽団」のボーカルだったのです。（近藤宏一さんの「愛生学園の生活と“青い鳥楽団”そしてわたしのふるさと」については、ハンセン病市民学会の教育部会ホームページの、今年の交流学習会報告をぜひご覧ください。）

その後、佐々木さん自作の陶芸トトロを送っていただきました。今も我が家の窓辺でニッ!と笑っています。

そして・・・、私の悪いクセで、お礼の手紙も出さないままずっとご無沙汰。窓辺のトトロと目が合う度に佐々木さんのお顔が浮かび、ご無沙汰をわびてました。

今年の教育部会交流学習会が、全生園で行われることになり、佐々木さんに再会できることも楽しみに参加しました。

さて、全生園に着いてまず向かったのはもちろん佐々木さんち。アポなしでピンポン・・・。なんと、佐々木さんはここ一週間くらい体調不良で床に伏しておられるとのこと。なのに・・・延先生と一緒に上がりこんだ私でした。佐々木さんは顔色も悪くお声も弱々しくて、突然訪問した無礼に身を小さく？してお話を聞いていましたが、話題が「青い鳥楽団」の近藤宏一さんになると、だんだんと語気が増し、いつしか私たちもお話しに吸い込まれていきました。話しに花が咲き、さっきまでの体調不良はどこへやら・・・、笑顔いっぱいの佐々木さんでした。そして次の日、2日目の交流学習日程を済ませた夜9時過ぎ、教育部会の7名で訪問。（その日はちょうどXマスイブ）クリスチャンの佐々木さんは「今年はよいクリスマス、体調もすっかりよくなったよ」と私たちを歓待してくださいました。

佐々木さんは1946年岩手県の間地のお生まれで、12歳の時「東北新生園」に入所とのこと。

小さい時は羊の餌やりや風呂の水汲みなどしておられたそうです。「その頃のお風呂は鉄砲風呂といってね、木の樽のような風呂の中に煙突があって、その煙突のぬくもりでお湯になる。水はポンプ式の井戸水を汲み何度も運んで入れた。それは子どもの役目だね。」と、遠い昔を懐かしむように話されました。故郷の幼き日の実家の模型とその庭にあった鉄砲風呂の模型も陶芸で作られていました。実家の玄関脇には馬小屋があり、馬も顔を出しています。鉄砲風呂には、仔ブタが気持ちよさそうに入っていました。佐々木さんのお部屋の棚には、サングラスを掛け、ハーモニカを吹いている白いブタが100匹以上も・・・。実はこのブタ、近藤宏一さんなのです。

“近藤ブタ”が指揮する全員サングラスのミニ白ブタ「青い鳥楽団」が飾ってあります。「なーんだ青い鳥楽団はこんな所にいたの?」。当時の「青い鳥楽団」はもう解散していても、ここに“新「青い鳥楽団」”が立派に結成されて、今も活躍し続けていると思うと、とってもうれしくなりました。もちろんその周りには何百ものトトロがいて、訪れた人たちに大切な“忘れ物を届けて”くれています。

楽器もスポーツも文芸も苦手、何が得意というわけでもない。何をしようか?と考えた時、陶芸だったら出来るかもと、始められたそうです。看護師さんに「トトロを作って・・・」と頼まれたのがトトロを作るきっかけになったとか。

佐々木さんは、「彼に出会わなかったら今の私はない」と言われるほど近藤宏一さんのことを、師と仰ぎ、父と尊敬しておられるのです。近藤宏一さんの、決して愚痴を言わずいつも前向きで、自分が置かれている状況を受け入れた上、希望をもって生きてこられたその人生は、「青い鳥楽団」のメンバーの皆に大きく影響を与えられたそうです。「『青い鳥楽団』と関わることが出来たのも、ハンセン病になった特権、『生きる』ということとはどんなことかを学んだ。」と佐々木さん。

話しはどんどん盛り上がり、途中「高校三年生」の歌など数曲も飛び出し、今だ衰えぬ美声に拍手喝采（昨日まで、病人だったとはとても思えない）。時の経つのを忘れ日付が変わろうとするまで、たのしい楽しいクリスマスイブでした。

腰を上げようとした私たちに、「ハンセン病問題の過去を知ることも大事。しかし、ハンセン病問題の何を見るか?そこをしっかりと学んでほしい。そして、今、どうなのか?これからどうなっていくのか?どうすればよいのか?私からのお願い、今をもっと見つめてほしい。」と言われたことばが深く残りました。

今回の教育部会交流学習会の予定には入っていませんでしたが、療養所を訪れるということはこうした思わぬ出会いがあり、交流が生まれ繋がりを広げていくよい機会です。そしてそのことは、封印されたかもしれないハンセン病療養所のかつての姿や入所者の生きざまを、聞かせていただくことができる、学習というより、私たちの心の成長の肥やしとなり、生きるパワーをいただくことができる至福の時でもあります。

佐々木さんが笑顔いっぱいで語られた幼き日のふるさとのこと。近藤宏一さんのこと。今を生きること。どんな境遇に立たされようと“自分らしく生きる”ということをお忘れず今日までこられた姿があつた笑顔の中にあつたのだと確信しました。佐々木さんのお人柄が“トトロと近藤ブタ”にそのまま現れています。今日も我が家の窓辺で、近藤ブタがハーモニカを吹きトトロがニッ!と笑っています。